

玉燈

～タイトル「玉燈」によせて～

「玉」は立派なものに磨きあげる、「燈」は教え、照らすを表し、「子どもへの愛育」と「情熱に満ち溢れる教師道」をイメージしています。また、「玉燈」は、郷土の先人 國友一貫斎の代表的発明品としても知られています。

みんなで未来を創るまち長浜 ～若者が魅力を感じられるまちに～

長浜市教育委員会事務局
管理監 為永智子

私の就学前教育との出会いは、平成21年度に「子育て支援課」で、保育所業務に携わったことから始まります。その後、市内就学前教育をさらに充実させるため、平成24年1月に「幼児課」が創設されました。保育・幼稚園教育に携わる部署が教育委員会内に設置されたことは、県内初の試みであり、当時としてはとても珍しいことでした。その当初メンバーとして幼児課に異動したことを振り返り、当時のことを懐かしく思っているところです。

あれから7年、我が国は少子化問題において最大の危機に直面しています。長浜市においても深刻化しており、就学前（0～5 歳児）の人口を比べると10年前とは約1,000人近く減少しています。その大きな要因として、若い世代における未婚化・晩婚化が進行していることや、仕事と子育ての両立の難しさによる不安から、子どもを産まない選択をするということが考えられています。

このような状況の中、一方では子育てとの両立を図るための「保活」といわれる保育所等への入所希望は高まるばかりで、幼児課窓口には毎日のように相談や申請に來られており、「少子化？」と思ってしまう現状がみられます。さらに、保護者のニーズの高まりとともに、保育の内容は多様化し、制度も複雑化していく中で、職員や保育者の高いスキルが求められているのも確かです。

いつの時代も、保護者にとって子育ては難しく不安なものです。こうした不安を少しでも軽減するため、就学前教育の充実を図り、一人でも多くの保護者に「子育ては大変だけど楽しい」と思ってもらえるように、さまざまな子育て支援施策に取り組んでいるところです。

国では、令和5年4月にこども基本法が施行されたのと同時に、こども家庭庁が創設され、すべてのこどもや若者が将来にわたって幸せな生活ができる社会を実現するための「こども施策」が社会全体で推し進められています。本市においても、「長浜に暮らす若者が、現在も、将来も、魅力を感じられるまち」を創るため、「未来こども若者局」が創設され、こども・若者の声を聴きつつ、それらの声が施策や行動計画に反映されるように取り組んでいるところです。

先日、この施策の一環として、「中学生トーク」を実施しました。市内各中学校の代表2名が集まり、「みんなで長浜市について考えよう♪～あなたは市長です!! 億円あったら何をする?～」と題し、自分が市長だったらどのような施策に取り組むかについてチームで考えてもらいました。中学生ならではの視点で、びっくりするような斬新なアイデアが出され、市の課題を指摘・分析し、そこから施策につなげるなど、市長になりきって真剣に考える子どもたちの姿がありました。

なかでも特に印象に残ったのは、彼らの口から出てきた「自慢の長浜」というフレーズでした。ある生徒は、「今も自慢の長浜だけど、もっと自慢したい」と語ってくれました。都会にあこがれる若者もたくさんいる中で、「長浜が好き!」と熱い郷土愛を持ってくれる中学生がいることに感動しました。これらの施策提案を市長・教育長の前でプレゼンをした彼らの姿はとても頼もしく、聞いていて思わず、「今後は君たちに長浜市を任せることにする! さあバトンを渡すよ!」という気持ちになりました。

限られた時間で、学校の枠を超えて同年の仲間と一緒に考え出し、内容について検討を加えて、市長・教育長の前で提案する。子どもたち一人一人の持っている力が最大限に発揮されていました。

今後「こども政策」を推進していくにあたり、何よりも大切にしたいのは、こどもや若者のみなさんの意見です。こうした中学生たちの生の声、またここに参加しなかった子どもたちの声も拾いあげて、こどもや若者に「長浜がいちばん好き!」「長浜で子育てしたい」と思ってもらえるような魅力ある長浜を創るため、若い世代の声を聴き続けていきたいです。



研究研修室より

この夏、長浜市主催で実施した教員研修会は全部で21講座で、のべ902名の先生方が参加されました。本紙ではその一部の内容と受講者の感想をご紹介します。

令和5年度 ICT 教育推進教員養成講座

講師：野中 健次 氏

[教育 DX プロデューサー 株式会社わけわけ代表取締役]



長浜市教育センターでは、昨年度に引き続き ICT 教育推進教員養成講座を開催しています。子どもたちが主体となる授業の実現や、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させた授業づくりを目指すために、ICT を効果的に活用していくことが考えられます。推進教員の先生方が本講座を通して、ICT 教育の推進リーダーとなる高い技術と知識を身に付け、長浜市の教育の発展に力を発揮していただくことを期待しております。

令和5年度推進教員の先生方（敬称略）

長浜小学校	小林 健斗	余呉小中学校(前期)	教野 直子
長浜南小学校	磯崎 俊希	西中学校	中川 加代
びわ北小学校	山本 麻由	南中学校	富永 裕紀
古保利小学校	塚田 勇樹	高月中学校	宮内 佑輔
高月小学校	西田 知朗	虎姫学園(後期)	榎並 毅

●第1回養成講座 7月26日(水)【さざなみタウン】

GIGA スクール構想を学び、先進地の事例に学びました。講座の後半ではグループごとに ICT 活用の意義や実践についてまとめました。

●第2回養成講座 8月7日(月)【さざなみタウン】

「主体的・対話的で深い学び」を実現させる手法の一つであるプロジェクト型授業【PBL】について学びました。実際の実践事例を学び、グループで実際に指導案を作成しました。

ICT 教育推進教師の授業を公開します!!

今年度から、10月・11月中に ICT 教育推進教師養成講座を受講されている10名の先生方に公開授業を実施していただきます。本講座で学んでいたことや、他市町の先生方との交流から学んでいたことを生かして授業をしていただきます。ICT の効果的な使い方や授業改善のヒントを見つけるために実際の授業を参観し、みなさんと一緒に学びを深め、広げていきたいと考えています。

※実施日時などの詳細は校務支援システムにて市内全小中学校教員の皆様にメールにて配信しております。

学びの実験室 小学校理科講座①②

7月31日(月)・8月1日(火) 長浜バイオ大学
参加者【34名】

理科の学び、実験のおもしろさに触れてもらうべく、教職4・5年次の小学校の先生方を対象とした研修を実施しました。バイオ大学の宇佐美昭二先生、カ石正弘先生にご指導いただきながら、教科書に沿って子どもたちの興味関心を喚起し、学ぶ意欲に火をつける実験を体験してもらいました。先生方一人一人が自然の不思議さに目を輝かせておられる姿が印象的でした。

受講者の声

子どもたちに理科好きになってもらうためには、まず教師自身が理科を楽しむことが大切だと感じた。生活の中の身近なものから「なぜ?」「調べてみたい」と興味関心が生まれるものを学習に積極的に取り入れて、楽しみながら学ぶ理科の充実に繋げていきたい。



令和5年度 授業改善研修Ⅰ ～令和の日本型学校教育とは？

講師：藤村 裕一 先生 鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教授

文部科学省各推進事業アドバイザー・総務省各事業アドバイザー

7月28日(金) 湖北文化ホール 参加者【 96名 】

今年度は湖北文化ホールでの集合での研修を開催し、先生の熱意が伝わってくる研修となりました。

今年度は「令和の日本型教育 とはどんなものか、新たな時代の学びを考える」と題して、21世紀型の人材像の転換・学力観の転換・授業観の転換について、なぜ今教育改革が求められているのかという理論的な面を教示していただくと同時に、全国各地の小中学校で実践されている授業改善の好事例を具体的にご紹介いただきました。中でも「個別最適な学び」と「協働的な学び」の様々な実践事例やアナログの良さとデジタルの良さを使い分けた ICT の効果的な活用事例、また秋田県の小学校での「学び方を鍛える」全校での取組などを紹介され、とても学びの多い研修となりました。



受講者の感想 ～研修の中で最も印象に残ったこと～

- ・「GIGA スクールはこんな授業をなくすため」の一覧は、ストレートに意識改革の必要性を感じた。
- ・日本の教育が、諸外国と比べて大幅に遅れていること。(中略) どのように遅れているのか、具体的な数値も示していただき、本当に遅れていることを実感し、危機感を覚えた。
- ・「Teacher であることをやめましょう」という言葉。子どもを学びの主役にするために必要だと感じた。
- ・実践事例については、具体的な写真やお話で非常にわかりやすかった。
- ・「吟味する力をつけること」と、そのために教師が「問題発見の4つの方法」を授業に仕組み、子どもたちの力を高めるようにしていくことの大切さを学びました。

令和5年度 長浜市就学前教育研修会

8月9日(水) 虎姫文化ホール

参加者【 156名 】

□研究発表 □指導助言 花園大学教授 炭谷 将史先生

□カリキュラム改訂総説説明 □教育講演会 びわこ学院大学教授 中井清津子先生

『のびのび、いきいきと主体的に体を動かして戸外で遊ぶ子をめざして』

★にしあざい認定こども園★

～自ら遊びたいくなるような園庭環境を生かした遊びの展開や環境援助のありかたを探る～

『園庭環境を見直そう!』～主体的な遊びに必要な環境援助を探る～

★わかば幼稚園★

研究発表

研究の成果として、子どもたちが主体的に遊ぼうとする姿につながり、遊び方の自由度が広がったり、子どもどうしの関わり合いや思いや考えを共有する姿につながり、研究のねらいにせまることができ、大きな成果を得られたという研究報告でした。

教育講演会 「探求心を育てる保育～学びの過程と質～」

講演の中で中井先生は「探求心」を育てる保育者の役割ということについて言及されました。

「保育者は日頃の子どもの興味関心を捉え、探求を共有することが大切であり、一人一人の子どもに対する感受性や応答性が重要です。子どもは、その瞬間を生きているので、保育者からの瞬時な応答が大切であることは、言うまでもありません。子どもの呟きを聴いたり、行為を観察したり、その意味を理解したりするなど、子どもの心の揺れや間といった心の動きを感じ、寄り添える保育者であってほしい。」と願っておられました。



を意識してみましょう

どなたもご覧になったことのあるこのマーク。
『非常口のピクトグラム』です。何気ないデザインのように思いますが、視認性の高いコントラストで配色されています。



今回は、“色”の視点から、わかりやすいデザインについて考えてみましょう。

色には色相、明度、彩度という三つの要素があります。これらの要素を頭に入れておくだけでデザイン力がぐっとアップしますよ。

●色相環について



色相環で補色の関係にあるものは互いの色を引き立て、類似色は統一感のある配色になります。

●明度について



色の明るさの尺度を明度といいます。より白に近い色が「明るい色」、より黒に近い色が「暗い色」となります。

●彩度について



色の鮮やかさの尺度を彩度といいます。彩度が高い色は、「鮮やかな色」となります。白、灰、黒は彩度がゼロです。

では、実際のデザイン例をもとに考えてみましょう。

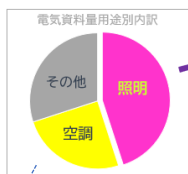
【デザイン例】

補色を使うと引き立ちますが、色が多いと注目ポイントがわかりにくくなります。

類似色や同系色でまとめると、落ち着いた印象に。

学校・教室でできるネットゼロ

- 節水を心がけよう
- ごみの分別をしっかりとしよう
- 電気の使い方を見直そう



照明にかかる使用料削減
*こまめにON・OFF
*自然光取り入れで明るさ確保

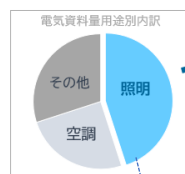
委員会活動による啓発

彩度や明度が高いと目がチカチカ！

背景色と文字色の明度にコントラストがないと読みづらい。

学校・教室でできるネットゼロ

- 節水を心がけよう
- ごみの分別をしっかりとしよう
- 電気の使い方を見直そう



照明にかかる使用料削減
*こまめにON・OFF
*自然光取り入れで明るさ確保

委員会活動による啓発

色遣いによって、注目してほしいポイントがわかりやすくなる。

このように色の持つ力を少し意識して伝える情報をデザインすることで、読み手に伝わりやすい資料にすることができます。教室でも大型モニターを使用する機会が増えましたが、提示する資料が白背景であると目が疲れやすくなるそうです。これは「白」の明度が高いことにより、目に飛び込んてくる光の量が多くなるためです。モニターに表示させる場合は、ダーク背景に明度の高い文字にするなどの工夫をするとういでしょう。

背景白と黒文字の
コントラスト(◎◎)

ダーク背景に
明るい文字(^^)